

鴨川西岸まぼろしの宿―81コロキウム・in京都

あたし の 京都

河野裕子

ちょうど二十年の昔になる。永田和宏が企画し、同世代の歌人に呼びかけて、京都で「81コロキウム・in」を開催したことがある。コロキウムというのは、集談会とでも訳せばいいだろうか。この企画の意図は、公開しない場所で、限定した人数で集中して討議したいというものであった。

呼びかけに応じて全国から十二人の人たちが集まった。東から佐佐木幸綱、高野公彦、三枝昂之、三枝浩樹、小池光、北海道から細井剛、宮崎から伊藤一彦、仙台から佐藤通雅、京都から永田和宏、安森敏隆、光田和伸、河野裕子の面々である。呼びかけに応じない人は一人もなく、しかも皆手弁当であった。

日程は一泊二日、参加者は全員一人一時間の発表をする。メンバーに加えられた私は短歌を作るのは好きでも、理論立てて人前でも

の言うのは苦手である。そんな経験もない。どうしたものかと思った。くつきりとものを言うには数字として表れたデータが説得力を持つだろうと考えた。中城ふみ子の歌における命令、否定、断定表現を数え上げ図示しながら、その内面との必然性と相関について述べることにした。

この準備にも手間取ったが、それよりも会場を予約したり参加者との連絡をしたりという雑用でくたびれてしまい声が出なくなってしまうたのには参った。今から考えると、人前で喋らなければならぬというストレスのせいだったような気がする。

三月二十一日、二十二日が本番の日だった。会場は京大病院となりの京都教育文化センターである。ちょうどお彼岸にあたったために、京都駅が混雑して参加者の到着が遅れ、一時

開会が二時にずれ込むことになってしまった。天候も悪かった。二時ちかくなつてようやくたどり着いた人があった。高野公彦さんである。雨合羽を着ていたが、ぐっしより濡れて、なんと單車でやつて来たのである。千葉から京都まで何百キロあるのか私には見当もつかないが、走りづめに走ってきたにちがいない。止まってしばらくのあいだ真っ黒い單車は熱くずんずんと音をたてていたし、跨った高野さんもすぐには降りなかった。雨と汗に濡れた顔が上気していた。あのコロキウムでは印象的な場面が幾つもあったが、一番におもいだすのはこの場面である。

第一日目、二時スタート。五時まで三人が喋った。トップは小池光さんだったのでないか。二十年の間にわが家は六回の引っ越しをしたために、当時の資料が散逸してしまい

正確なことがわからなくなってしまった。それで参加者の何人かに問いあわせているうちに、少しずつあの会の輪郭が再現されてきた。誰もが、おれたち手弁当で集まったんだよねえ、今じゃあもうあんなこと誰もやらない、もうできないね、と言った。うん、うん、と肖きながら、二十年がたってしまったんだ、と不思議な納得をしてしまう。

伊藤一彦さんによると、五時までやった後、永田の案内でイタリア料理を食べに行つたという。当の永田はそのことをすっかり忘れていたが、伊藤さんは当夜のことをこんな歌にしている。

私わたくしといふ暗鬱あんうつがあつまりてイタリア料理語らひ食へる 伊藤一彦『火の橋』

ともかく私たちはイタリア料理を食べたら

しい。普通ならそこで酔っぱらっておしまいになるはずが宿舎に帰ってコロキウムを再開している。九時から十二時まで、畳の部屋に車座になって、文字どおり膝つき合せての会であった。生真面目とか何というかみんな若かったし、自分たちで自分たちの世代の論を組み立てようと必死だったのである。

二日目は、七人か八人が喋ったはずである。九時から始まって昼食をはさみ夜までやった。トップバッターは佐佐木幸綱さんで、見学者として参加していた今野寿美さんの記憶によると、幸綱さんはコップ酒を飲みながらの発表だったという。そうだったかもしれない。

二日目の夜は、高野さんたち四人の人がわが家に泊まり、翌日、伊藤さんは飛行機に乗るため早立ちだった。佐藤通雅さんがお土産の木独楽の回しかたをうちの子供たちに教え

てくださったことをよく覚えている。二年生と幼稚園の子供たちだった。木独楽はお腕くらの大きさがあり緑と赤の線が入っていた。誰に聞いても、永田も私も思い出せないことが一つある。一日目の宿舎がどこであったかがわからない。永田が鴨川の西を自転車で走って探してくれたがとうとう分からなかった。みんなが車座になって座った畳の部屋は、くつきりと覚えているのに宿の名前を思い出すことができない。鴨川の西岸にあったことは確かなのだ。

81コロキウム・in 京都、残念ながらあのときの記憶は残っていない。しかし、個人の呼びかけを意気に感じて、手弁当で駆けつけてくれる同世代者がいる、そういう時代が確かにあり、私たちはそういう時代を生きたのである。(かわの・ゆうこ「塔」選者)